

小児看護

THE JAPANESE JOURNAL OF CHILD NURSING, MONTHLY

6

Vol.47 No.6 JUNE

2024

多職種とともに子どもと 家族をささえるグリーンケア 診断時からの継続した支援



連載

ひらめく かがやく 子どもの力
子ども療養支援士との協働

医療を乗り越えるための遊び

へるす出版

佐藤聡美 Sato Satomi

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授

第35回 水無月の手紙

皆さんが初めて手紙を書いたのはいつ頃だろうか。誰に宛てて書いたらだろうか。

好きな人に送ったはずの手紙が、転居先不明で戻ってきた。そういう意味の短歌がテレビで流れた。選者は、「転居先さえも知らせてもらえない程度に関係だったのだな、という切なさが滲んでいますね」と解説していた。司会者はお一つと小さな驚きと感心を選者に示した。

しかし私は、好きな人が転居しているのを知っていてもなお、関係が終わったことを実感するために、あえて送った可能性さえあるのではないかと、心の中で異を唱えた。その人はもういないという現実を手に触れる形にしたかった心情だってあるのではないかと、読む人がいることを期待していない手紙である。

私が初めて手紙を書いたのは、小学校4年生か5年生だったような気がする。当時、文通とかペンパルというのが流行った。北陸に住む私から、四国に住む親戚の女の子に手紙を書いた。初めて人に住所を聞いたような気がする。

いや、違う。初めて住所を聞いたのは、保育園児のときだ。担任の先生に年賀状を出すために、住所を聞いてくるよう親に言われた。ところが、私は年賀状も住所も何のことなのか理解しておらず、もし「住所はない」とか、「住所はわからない」とか言われたらどうしようとひどく心配になった。結局、先生は紙に住所を書いて渡してくれたので、私は親に渡すだけで済んだのだが。

それから数年後に、初めて四国にいる親戚に書いた手紙。「元気ですか」と書いた後に、何を書くべきかと地図でしか四国を知らない私は、どんなところだろうと想像しながら、「私は元気です」と書いた。そして「学校は楽しいですか」「私は楽しいです」と書いた。手紙とはこんな感じなのだろうか、と首をかしげながら書いた。それにもかかわらず、便箋の終わりになるほどに、あれもこれも書きたくなくて、文字が小さくなり、行を増やしてしまう始末だ。今でいうところの文字の渋滞である。

そして、アメリカに留学したときは、家族や友人にエアメールを出した。赤と白と青のストライプの封筒が格好よく見えた。実際は、どんな封筒でも送れるのを知って、滅多にストライプの封筒を使う機会は無かったのだが。

今では、メール上の等間隔に並べられた美しい文字の配列に慣れてしまった。けれども、あれだけ便箋に迷い、文面に悩み、大事に封をして、郵便ポストに投函していたのが懐かしい。メールは中身をむき出しに送っているようなものだからだ。

この間、論文指導をした医師の学生が一筆箋をくれた。「先生が指導教官で良かったです。本当にありがとうございました」と書いてあった。メールで送ることはできただろうに、手書きであったことが心に残った。

梅雨の時期、室内で過ごすことが多くなる。たまには誰かに手紙を書いてみてもいいかもしれない。

佐藤聡美
さとう・さとみ

聖路加国際大学公衆衛生大学院准教授。博士。臨床心理士、公認心理師。NPO法人エゴノキクラブ理事長。富山県出身。米国のBellevue Community Collegeを卒業後、お茶の水女子大学大学院修了。国立成育医療研究センターにおいて小児がんの臨床と研究に携わる。お茶の水女子大学特任講師を経て、現職。著書『看護師と家族でかなえる最高のサポート：子どもの入院から就学・就労まで』。工作好きな一児の母。令和4年度大谷賞(日本小児血液・がん学会賞)、第41回とやま賞受賞。